

復旦大學歷史系
中國近代史教研組

中國近代史

菅 榮一
加藤祐三
監訳



復旦大學歷史系 編著
中國近代史教研組

中國近代史

菅 榮一

加藤祐三

監訳

東方書店

監訳者・訳者

菅 栄一（すが えいいち）

1924年生まれ。東京外国語大学中国語科卒業。サンケイ新聞入社，ソウル特派員，外信部次長をへて1964-66年北京支局長，帰国後論説委員，編集委員，72，74，75年に訪中。著書『日中問題』現代中国と交流の視角（三省堂，共著）など。

加藤 祐三（かとう ゆうぞう）

1936年生まれ。東京大学文学部東洋史学科で中世ペルシャ史を学び，同大学院で中国近現代史を専攻。東大東洋文化研究所助手をへて現在は横浜市立大学助教授（東洋史担当）。著書『中国の土地改革と農村社会』（アジア経済研究所）共訳書にW. ヒントン『翻身——ある中国農村の革命の記録』（平凡社）など。

田畑 光永（たばた みつなが）

1935年生まれ。東京外国語大学中国語科卒業。東京放送入社，1971，72，73，74年に訪中，東京放送報道局勤務。

須山 宏（すやま ひろし）

1945年生まれ。京都大学農学部卒業。中国農業経済専攻。

原島 春雄（はらしま はるを）

1946年生まれ。京都大学文学部卒業，中国思想史専攻。

中国近代史

1976年4月20日 初版第1刷発行

監訳者	菅 栄 一
	加 藤 祐 三
発 行	株式会社 東 方 書 店
	東京都千代田区神田神保町 1-3
	電話294-1001(代) 振替東京36500

凡 例

- 一、本書は、上海・復旦大学歴史系中国近代史教研組編著『中国近代簡史』（上海人民出版社、一九七五年五月第一版、同六月第二次印刷）の日本語全訳である。
- 一、本文中の「」は原書の「」を示し、『』は原書の《》にあたる。また、（）、＊は原書と同じである。
- 一、監訳者・訳者による注は、本文の中で「」でかこんだ。また本文中に監訳者・訳者による小見出しを書き加えた。本文中の主な地名・人名には各章の初出に中国音の拼音による発音表記をつけた。
- 一、本文中の毛沢東著作およびマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、ホー・チ・ミン、金日成などの著作からの引用部分は、原書のゴシック体を「」で表示した。
- 一、本文中の毛沢東著作からの引用部分についての日本語訳文は、北京・外文出版社刊、『毛沢東選集』日本語版の訳文に準拠したが。その他の著作からの引用部分についての日本語訳文は、現在日本で翻訳されているものを参考にしながら、監訳者・訳者による部分もある。
- 一、本文中の右の引用部分は、章末に一括して表記した。毛沢東著作からの引用部分については、『毛選』と略記し、「外文、日本語版、巻・ページ」を書き加えた。その他の著作からの引用部分については、原書の中国語版のページは削除した。
- 一、本書中の写真は、全部原書に掲載されているものであり、翻訳・出版にあたり中国・国際書店からとくに提供をうけた。地図については、原書のものを使用した。
- 一、付録の中国近代史年表は原書の訳のほかに監訳者が日本・国際関係の部分をつけ加えた。

目次

第一章 アヘン戦争	9
-----------	---

一 犯罪的なアヘン貿易 9

二 虎門でのアヘン焼き払いと広州の戦い 18

三 三元里の怒号 28

四 砲口下の条約 34

第二章 太平天国革命	45
------------	----

一 洪秀全と金田蜂起 45

二 怒濤のごとき勝利の進軍 54

三 意気盛んな反孔闘争 63

四 『天朝田畝制度』 69

五 民族の尊厳を保持する外交 74

第三章 イギリス・フランス連合軍の侵略	80
---------------------	----

一 「アロー号」事件 80

二 大沽陥落と『天津条約』 89

三 円明園を略奪 94

四 ツァー・ロシアの火事場泥棒 105

第四章 太平天国後期の英雄的な闘争 115

一 天京上空にたちこめた暗雲 115

二 天京をうちかためる戦闘 122

三 外国侵略者にたいする痛撃 129

四 革命の火は不滅である 138

第五章 洋務の「新政」と边境の危機 148

一 洋務の「新政」とはこんなもの 148

二 边境ののろし 156

三 中仏戦争 165

四 反キリスト教闘争 175

五 社会経済と階級関係の変化 183

第六章 甲午中日戦争 193

一 日本の対外拡張 193

二 日本軍の朝鮮・中国侵入 196

三	『馬関条約』	206
四	台湾人民の英雄的な抗戦	211

第七章 戊戌維新

一	分割の激化	219
二	改良主義思潮の形成	228
三	「公車上書」	234
四	維新と保守の闘争	243
五	改良主義——この道は通れない	250

第八章 義和団運動

一	反帝の嵐が全国を席卷	261
二	八ヶ国連合軍の進攻	269
三	勇気を奮って侵略者に反撃する	277
四	ツァー・ロシアの東北にたいする不法占領に反対する	287
五	屈辱的な『辛丑条約』	294
六	義和団の歴史的功績	300

第九章 辛亥革命

一	孫中山と興中会	304
二	奔流する民主革命の潮	309
三	同盟会の成立	321
四	二つの戦線からの出撃	326
五	革命を阻止するにせ立憲	334
六	嵐のような勢いの大衆闘争	338
七	武昌蜂起と各省の呼应	346
八	盗みとられた勝利の果実	355

第一〇章 復活と反復活……………367

一	袁世凱独裁支配の成立	367
二	尊孔と反孔の闘争	377
三	帝制の醜い茶番劇と護国運動	383
四	「南と北はひとつ穴の貉にひとしい」	392
五	新しい時代の曙光	401
	監訳者あとがき	413

付 録

中国近代史および日本・国際関係年表

中国近代史

帝国主義が中国の封建主義と結びついて、中国を半植民地および植民地に変えてきた過程は、中国人民が帝国主義とその手先に反抗してきた過程でもある。

帝国主義と中華民族との矛盾、封建主義と人民大衆との矛盾、これらが近代中国社会の基本的な矛盾である。……だが、帝国主義と中華民族との矛盾は、さまざまな矛盾のなかの主要な矛盾である。これらの矛盾の闘争とその先鋭化は、日ましに発展する革命運動をもたらさないではおかない。

この百年来、中国人民の不撓不屈のますますはげしい英雄的闘争によって、帝国主義はいまなお中国を滅ぼすことができないでいるし、また永遠に中国を滅ぼすことはできない。

（『中国革命と中国共産党』）

毛澤東

第一章 アヘン戦争

一 犯罪的なアヘン貿易

一八四〇年のアヘン戦争の勃発は中国近代史の始まりである。野心満々のイギリス侵略者は、アヘンと大砲をもって中国の正門を吹きとばした。このときから中国は封建社会より半植民地・半封建社会へと一歩一歩かわっていった。

偉大な指導者・毛主席は指摘している。「帝国主義が中国の封建主義と結びついて、中国を半植民地および植民地に変えてきた過程は、中国人民が帝国主義とその手先に反抗してきた過程である」①「イギリスのアヘン侵略に反対する戦争、イギリス・フランス連合軍の侵略に反対する戦争、帝国主義の手先・清朝に反対する太平天国の戦争、フランスの侵略に反対する戦争、日本の侵略に反対する戦争、八ヶ国連合軍の侵略に反対する戦争、これはみな敗北した。そこで帝国主義の手先である清朝に反対する辛亥革命がおこった。これがすなわち辛亥（一九一一年）にいたるまでの中国近代史である」②毛主席の論断は、中国近代史の本質を科学的に概括しており、われわれが中国近代史を学ぶときの大綱である。

封建支配の暗雲 清朝は中国封建社会の最後の王朝である。この王朝は嘉慶年間（一七九六—一八二〇年）になると、すでに多くの危機をはらみ、日ごとに没落して、ちょうど『紅樓夢』にあるように、「外からみると見かけはまだそれほどでもないが、ふところはもう寒さむとして」いた。

封建社会は地主階級の土地所有制を経済的基盤としている。清朝の支配期には、満人・漢人の地主階級による残酷な搾取によって、土地と財富は皇帝・貴族・官僚・地主・大商人の手にますます集中していた。皇帝は全国最大の地主で、一八二二年(嘉慶一七年)の統計によれば、皇帝が直接・間接に握っている土地だけで八三万頃(一頃は一〇〇畝[↑])にのぼり、これは全国の総耕地の一パーセントにあたる。その他の大地主・大官僚もまた広大な土地をもち、たとえば河北の「懷柔の郝氏は膏腴(肥沃な土地)万頃あり」、また江南(長江)揚子江下流のデルタ地帯は「田地の多くは富家・大戸の産に属し」、「田主は耕すことを知らず耕者は多く田なし」というありさまである。土地の兼併・集中の過程はまた農民の破産・窮乏化の過程でもあった。土地がないか、わずかしかなかった多くの農民は、自分の農具を使って地主・貴族・皇室の土地を耕作せざるをえず、日ましに重くなる地代・税金・賦役・高利貸の搾取のもとで、飢えと寒さに耐え、牛馬にも劣る苦しい生活を送っていた。

封建的搾取制度を保護する清王朝は君主專制政権である。最終的な崩壊へ歩みゆく中で政治は日ごとに腐敗し、賄賂は官吏の上下にくまなく行きわたった。このころ民間でいわれていた「三年のあいだ知府をつとめると一〇万の銀が手に入る」という諺は、封建官僚がことごとく汚職に手を染めるという反動的本質をあますところなく示している。嘉慶朝(一七九六年)の初年、高級官僚の和珅^{ホシムン}が財産を没収されたとき、その資産はなんと銀八億両もあったが、これは当時の国庫収入の二〇年分に相当し、官界における職権乱用・金銭の強奪ぶりのはなはだしいことを見てとることができる。国家政権の主要部分をなす軍隊もまた次第に半身不随になっていた。八旗兵(軍事・行政組織。旗色により八隊に分け、京師駐在の禁旅八旗とその他の駐防八旗がある。最初は満州八旗のみだったが蒙古八旗、漢軍八旗ができた)と綠營兵(漢人を主とする軍事・治安組織)は九〇万近くいたが、軍備はそなわっておらず兵器は古く、武官は食糧をこまかし兵隊の給料を着服するのに忙しく、隊務をおろそかにしていたし、将

兵の紀律はたるんで訓練もその場のぎの状態であった。こういう軍隊は民衆に災難を与え民衆の財産をかすめとるばかりで、外からの侵略に抵抗する力をすでに失っていた。

崩壊しつつある封建的土地所有制と封建的差別支配をたてなおすために、清王朝は反動的な孔孟の道（孔子・孟子の道、儒教）をさかんに持ちあげ、宋・明いらい封建的な正統思想である三綱五常（君臣・父子・夫婦の主従関係と仁・義・礼・智・信の徳目）を核心とする程朱の理学を提唱し、これを精神的なくびかせとして人民をしぼりつけ、地主階級の独裁を強化した。清朝支配者は孔子に「大成至聖、文宣先師」という立派な称号をつけ加え、孔孟の道を科挙合格の資格と規定して知識人をまるめこみ、清朝に忠実な下僕を養成した。清朝支配階級は「孔子さまのお説教を宗教の教条とおなじにみなしてその信奉を人民に強制し」、③「倫理綱常」「人倫道德の理と三綱五常」に反対するわずかな反抗でも大逆不道であり、身を亡ぼす禍いになる。アヘン戦争の前夜、清朝の思想・政治にたちこめていたのはこの「万馬齊しく瘖す」という沈鬱な空気にほかならなかった。

内外の危機を先覚した詩人 清代の進歩的思想家で、有名な文学者の龔自珍（一七九二—一八四一年）は字を瑟人（ジン）といい、号を定庵（テイアン）という。浙江省仁和（現在の杭州）の人である。彼は地主階級の革新派の立場から出発して儒家を批判し法家を尊重し、改革を呼びかけた。清王朝の暗黒封建支配はすでに「目のまさに沈まんとする」段階にある、と激しく論難し、孔孟の道の「礼治」は人びとの四肢をしぼる「長い縄」だ、と痛撃する一方で、改革は歴史の必然であり、「古より今にいたるまで法の改まらないことはない」し、「乱は遠からぬところにあり」、早く「改革し」、「方針を変更し」、「功令を変える」べきである、と清王朝に警告を発した。

ところが、封建社会においては農民階級と地主階級の矛盾は調和しえない。地主階級は農民階級に慈悲心を發揮することはありえないし、農民階級もまた地主階級にたいする反抗をやることはありえない。一八三九年、

龔自珍は次の詩を書いて、当時の社会的現実を示した。

○ 塩銀を論ぜず河を籌せず

独り東南によりて涙すること多し

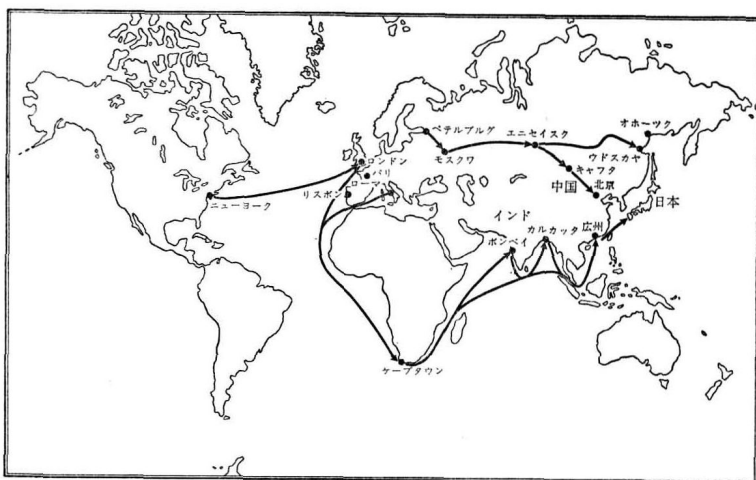
国賦は三升なるに民は一斗

牛を屠るはいずくんぞ穀を植うるに勝らんや

この意味は次のとおりである。清朝封建支配者はすでに塩と鉄の生産〔古くから官の専売の二品目〕に意を用いず、河川の修理や水利工事もせず、ただ東南各省の財富を搾取することだけを知っている。規定された税金は三升だが、官吏がつぎつぎと中間搾取するので、人民は米一斗〔二〇升〕を納めなくてはならない。このような毎日ほどのように送ったらいいか。耕牛を殺して活路を見つけるより方法がない！階級矛盾は日一日と激化し、嘉慶朝からアヘン戦争の直前まで、農民はたえまなく武装蜂起をして、北方では白蓮教徒、南方では天地会を主とし、地主階級の残酷な経済的搾取と政治的圧迫に相ついで反抗、清朝封建支配に大きな打撃を与えた。

清朝の国勢が日々に悪化していくとき、イギリス、フランス、アメリカ各国の資本主義は早いテンポで発展していた。世界第一の資本主義国家であるイギリスは、一八世紀後半からの工業革命をへて機械工業が次第に工場制手工業にとってかわり、生産は飛躍的に増大し、新しい原料供給地と商品市場の開拓を切実に求めている。「七つの海の王」と称したイギリスは砲艦をあやつって世界を股にかけ、いたるところで植民地を探し略奪した。ツァー・ロシアは経済・文化面で比較のおくれていたが中国侵略の野心はかえって大きかった。一七世紀中葉から黒竜江流域に闖入し、陸路から中国領土をうかがう悪魔となった。

第1章 アヘン戦争



アヘン戦争前における西方資本主義侵略勢力の東漸

イギリス 入超逆転をね 犯罪的な植民地事業の中で、イ
 らってアヘンを持ちこむ ギリスのブルジョア階級は海賊
 と商人との二役を一身にかねそなえていた。一六三七年、
 イギリス商船が初めて広東に現われたとき、中国の虎門砲
 台を砲撃し、船をかすめとり要塞に登って大砲を分取って
 打ち放し、一カ村を焼いた。一八〇八年、一三隻のイギリ
 ス軍艦は澳門を攻略、虎門を侵犯し、中国の水師〔海軍〕
 に撃退され、罪を認める誓約書を書かざるをえなかった。
 清朝政府は海からの外国侵略に対処し、また国内人民の反
 清闘争を防止するため、極めて長い時間にわたって「鎖国
 政策」を採用、広州一帯と外国通商貿易のみを残して他の
 沿岸諸港をすべて封じてしまった。一七、一八世紀にはま
 だポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスの「砲艦政
 策」は中国の正門を爆破することができなかった。イギリ
 ス政府は「砲艦政策」をもてあそぶとともに、一七九三年
 と一八一六年に前後してマカートニーとアマーストの使節
 を派遣し、北京にきて清朝政府に天津、寧波、舟山の各港
 を開放し、舟山群島を割譲し、関税を低減せよという侵略

的要求を提出したが、これもまた清朝政府によって拒絶された。

イギリス資本主義の急速な発展につれて、「商品の販路を不断に拡張する」という要求はブルジョア階級をして全世界を駆けめぐらせた」^④。とりわけイギリスは砲火と剣を用いてインドの植民地支配を強化するとともに、一八一九年のシンガポール占領後、領土が広く物も多く人口も多い中国市場を開放して安い工業原料を略奪し、中国をイギリスの植民地に変えるという欲望はいっそう切迫してきた。もし中国市場が開ければイギリス商品の中国での売れゆきは世界のその他の売れゆきよりもっと多くなるだろう、と彼らは欲にからんで打算してみた。ところが、イギリスの工業製品の中国市場での売れゆきは旦那方をがっかりさせた。遠くから海を渡って運んできた綿紡績や毛織物などは中国でわずかな販路しかなく、元手さえとれないこともあった。当時の中国は自給自足の小農業と家庭手工業が結合した自然経済を基礎としていたからである。多くの農民は一家ごとに一つの生産単位をなし、農業の生産労働に従事するとともに紡紗・織布・織麻などの家庭手工業の労働にも従事していて、「男は耕し女は紡ぐ」、「晴れたときは耕し、雨がふれば紡績につとめる」という生活をして、自分らの必要とする農産物を生産していたばかりか、大部分の手工業製品も生産していたから、外来商品にたいして強い抵抗力をもっていた。このころ労働人民の着るものは自分で紡いだ土布であり、官僚・士紳（旧い知識人で地方の権威者）の愛用した上等の絹織物や洋布（外国製の綿布）や毛織物は当然のことながら大量販売はできなかった。

これに反して中国の輸出品である茶、生糸、陶磁器、薬などはかつて外国でよく売れ、歓迎された。このように一九世紀初頭にいたるまで中国は対外貿易の中でまだ出超という有利な位置を保っていた。このころ廣州から流入する白銀（純度の高い貨幣用の銀）は毎年一〇〇万両から四〇〇万両のあいだであった。中国へきて商売をする少なからぬ外国商船は、持ってくる貨物は多くなく、大量の銀元をたずさえてきた。